ラジオ放送

＜平成27年7月～9月放送分＞

ON AIR

金光教の声

No.412

もくじ ～*contents*

＜取次を頂いて＞

☞ 取次を受けていきいきとされている方を紹介します。

●第１回　**願いの優先順位**
大阪府・道広教会 入江優子　*page 1*

●第２回　**寝坊してしまった**
新潟県・万代教会 松鷹真彰　*page 6*

●第３回　**抜け出せるかもしれないよ**
岡山県・本部在籍　辻 徳子　*page 10*

●第４回　**師匠の教え**
岡山県・早島教会 玉井光雄　*page 14*

＜平和＞

●**平和を生み出す心**
福岡県・竹下教会 田中一男　*page 18*

＜ラジオドラマ＞「ことの葉じんわり」

☞ 「心に響く言葉」をテーマにしたラジオドラマです。

●第１回　**生きて生かされる**　*page 22*

●第２回　**不合格おめでとう**　*page 27*

●第３回　**残った、残った**　*page 34*

●第４回　**当たり前は当たり前？**　*page 39*

●第５回　**幸せ貯金箱**　*page 45*

●第６回　**笑って許しておくれ**　*page 50*

●第７回　**最後の言葉**　*page 55*

●第８回　**腹立ち心をお供えする**　*page 61*

●第９回　**赤飯炊いて祝え**　*page 66*

《取次を頂いて》第一回

「願いの優先順位」

大阪府・道広教会　入江優子

ナレーション

結婚してからも、バリバリと仕事をする女性にとって、仕事と家庭の両立は難しいものです。特に、妊娠の機会を得ることは、大きな課題になるようです。

仕事や人生を支援するキャリアカウンセラーの入江優子さん四十六歳も、結婚して十年余りは仕事一色の生活でした。

入江　やはりキャリアを追うと、家庭内での嫁としての役割みたいなものが、たいへんおろそかになりまして、家の中でも、合宿所みたいな暮らしなんですね。もう忙しくって、毎日がバタバタ。主人も商売を始めていましたし、ですから、お酒も浴びるほど皆さんと飲みましたし、全然自分の中の自覚というものが、ものすごく薄いんですね。でも一方で、やっぱり子どもは欲しい、授かりたいというところとのバランスがものすごく悪い時期がずっと続いていまして…

ナレ　**四十三歳になって、ようやく専門医の診察を受けました。診断は、「妊娠出来る可能性が高い」というものでしたが、それでも入江さんは、なかなか仕事中心の生活を変えられませんでした。**

そんな中、普段からお参りしている大阪にある金光教道広（みちひろ）教会で、お取次を受けました。お取次とは、教会の先生が参拝者の話をじっくりと聞いて、神様にお祈りをして下さり、教えに基づきながら話してくれることです。

教会の先生は、「優先順位を決めることが大事ですよ」と言われました。

入江　とにかく一番大切にしなければならないことは何なの、となった時に、私の中ではたぶん仕事だったと思うんですね。でも優先順位を懐妊、赤ちゃんを授かりたいという方にいけば、絶対に優子ちゃんのその仕事も、いろんな今取り巻く環境も、整っていくから、そこを信じなさいって言われたんですね。そこを最優先すると、本当に、先方の都合で東京行きがなくなったりとかですね、先方の企業さんの都合で、その講師業が延期になったりですね。そういう不思議なことがものすごくあって、どんどんどんどんその自分の体を整える、家の中にいることができる環境が整っていったので、本当に神様が整えて下さっているんだなっていうことを、もう日々実感するしかないという感じでした。

ナレ　**そもそも入江さんと先生との出会いは、子どものころ教会のガールスカウトに参加したことがきっかけでした。**

入江　小さなころに私の中で強烈に覚えているのは、「金光教というのは他の宗教の悪口を言

わないんだよ。だから学校でも他の宗教の人と仲良くしようね」っておっしゃったんですね。私そのお話がものすごく大好きで、ですからお友達には、もちろんクリスチャンの方もいらっしゃいますし、もういろんな宗教の中でその人たちと共にというか、生かされているということに対しては、金光教ってすごいんだよ、みたいなことは、小さなころから思っていましたね。

ナレ　それからは、人生の節目ごとにお取次を受けてきた入江さん。そのたびに先生は、大切なことを教えてくれました。ただ、「懐妊を最優先する」という決断は、仕事のスケジュールがびっしりと詰まった入江さんにとって大きな勇気がいりました。しかし、これまでお取次の確かさを実感してきただけに、覚悟を決めることが出来ました。すると、それからわずか三カ月後、妊娠していることが分かりました。そして、四十四歳の時、元気な可愛い女の子を出産することが出来たのです。

入江　うれしかったもうれしかったですけど、神様こんなに直近で、この短時間で、自分に自然妊娠というようなおかげを下さるということに対して、まずはびっくりしました。

ナレ　入江さんは神様に心からお礼を申し上げました。こうして生まれた娘の桃夏（ももか）ちゃんは、今、二歳になります。

入江　言葉はまだちょっとママとか、パパとか、あっちとか、こっちとかですけれども。ボタンが大好きで、パパが出掛ける時にボタン締めてあげたいんですけど、時間が掛かりすぎて、パパ出勤出来ないみたいな感じですね。ハハハ。

ナレ　**高齢出産ならではの悩みもありました。**

入江　やっぱり若いママさんたちと公園でワーッといると、もう明らかに自分は相当年いっているわけで、これから十歳になったら二十歳になったら私はいくつだろうってみたいなことを公園で思うことは最初のころは多々あったんですよね。そのころは自分の中で、自分自身を追い詰めていくんですが、ある時に、年齢って今さら下がることってなくて、今が一番若いとなると、その日その日を神様から全力でおかげを頂く積み重ねでしかないっていう開き直りが、もう出来たので、ようやく立ち直りました。たぶん高齢出産のお母様方は、その辺のところは不安を抱えておられるんじゃないかなあと思います。

ナレ　**キャリアカウンセラーとして様々な方の相談を受ける入江さんですが、教会で先生にお取次を受けることが大きな安心感につながっています。**

入江　自分の人生のことをご相談できる場所があるっていうのはすごいと思うんですよね。自

分のことを聞いてくれるカウンセラーはいますけど、そこから先お祈りをしてくれるというのは金光教の醍醐味といいますか、話を聞いて下さったことをさらに神様に祈って下さるところがあるっていうのは、あの自分がカウンセラーだからこそ、その偉大さというか、すごさがよく分かると言いますか、ありがたさがよく分かりますよね。

ナレ　人生には様々な局面があります。その時、大事なことはまず、優先順位をはっきりさせる。覚悟を決めれば、あとはひたすら神様にお願いして自分なりの努力をする。入江さんの体験は、そのことの大切さを私たちに教えてくれます。

《取次を頂いて》第二回

「寝坊してしまった」

新潟県・万代教会　松鷹真彰

皆様おはようございます。朝早い時間にラジオを聞いて下さりありがとうございます。今朝は、私が早起きが苦手で悩んでいたころの話をしたいと思います。

私は、平成元年三月に高校を卒業後、大阪にある金光教の教会で修行をすることになりました。

教会では、毎日神様にお祈りをすることはもちろん、お掃除をしたり、教会の先生のお仕事を手伝ったりしていました。また、実際にお参りに来られた方のお話を聞かせてもらったり、信者の方々の前でお話もしました。更に、祭典に参列したりもしました。

高校生のころとは生活が一変し、着たことのない着物での生活、そして慣れない正座で足の痛みに苦しみ、何より、早起きは眠気との闘いでもあったのです。

早起きがとても苦手な私は、寝坊をすることがよくありました。

修行生活にも慣れたころ、寝坊をし、朝のお

祈りの時間に遅れる日が何日も続き、教会の先生から、「もう帰れ」と叱られました。

その時に、先生にお願いして、岡山県にある金光教の本部に参拝することを許してもらいました。本部では神様をお祭りしている所に、毎日早朝から夕方まで金光教の教主である金光様がおられ、誰のお話でもいつも聞いて下さるのです。

本部に到着後、「明日は、金光様がお出ましになる午前三時五十分には必ず起きて行って、お話をさせてもらおう」と思い、本部近くの宿舎で寝床に入りました。

ところが、「明日は早起きをしなければいけない」と思えば思うほど、なかなか寝付くことが出来ません。いつの間にか眠っていたのですが、しばらくして、目が覚めた時には、時計はすでに五時を回っていたのです。

「また寝坊してしまった」という思いが頭を巡りましたが、とにかく急いで本部に向かいました。こんな大事な時にも寝過ごしてしまい、落ち込む気持ちと情けない気持ちで神様にお祈りをして、金光様の所へ進み、「朝寝坊ばかりするので、早起きが出来るようにならせて下さい」とお話をしました。

すると、金光様は、**「あなたは起きられた、起きられなかったということにばかり目がいって、『目が覚めた』ということにお礼を申していないでしょう。今日の命があるからこそ、ここへも参ることが出来たんでしょうが。あなたは眼鏡を掛けていますが、その眼鏡に**

お礼を申していますか？　私は、眼鏡が無かったら見ることが出来ないのですから、眼鏡にも、『お世話になり、ありがとうございます』と、お礼を申しながら拭かせて頂いています。何事も順序があります。服を脱ぐにも上着から順番に脱いで最後に下着を脱ぐでしょう。順序を間違えたら、服を脱ぐことも出来ません。

金光教の教祖様は、『木の切り株に腰を下ろして休んでも、立つ時には礼を言う心持ちになれよ』とおっしゃられました。その教祖様というお手本に添って生活させて頂く稽古をするのです。

お世話になるすべてにお礼をする生き方が教祖様の教えて下さったことです。それに添った生き方をすることが修行成就につながります」

と教えて下さいました。

それまでの私は、目が覚めることは当たり前のことだと思っていました。ですから、目が覚めた時に、「起きられた」とか、「寝坊してしまった」ということしか思わず、目の覚めたことへのお礼など考えたこともありませんでした。

このように、金光様から、「お世話になるものへのお礼」ということを教えてもらうと、すぐに、ものの見方が変わりました。目が見えること。耳が聞こえること。歩くことが出来ること。トイレでおしっこが出来ることなど、それまで当たり前だと思っていたことが、本当は当たり前ではないのだ、ということに目が向くようになりました。

そして、教会へ帰る道中も、洋服や靴のお世話になっているのだな。イスのお世話になって座ることが出来るのだな。電車のお世話になって、電車を運転してくれる人がいるから帰ることが出来るのだなと、私たちの周りにはお礼が出来ることがたくさんあるのだと気付かせてもらいました。

大阪の教会へ帰り、先生に本部で金光様から教えてもらったことを報告すると、「とても大切なことを教えてもらいましたね。そのことを忘れないように、これから早起きを頑張りましょう」と、お許しを頂くことが出来ました。

その後も寝坊することはありましたし、早起きが苦手なことに変わりはありませんでした。ですから、朝、目が覚めても、「眠たいなあ。もう少し寝ていたい」という心が先に出てきて、すぐにはお礼の心が出てこないこともありました。

それでも、一日の初めに、神様に手を合わせる時、まずは、「今日も命を頂きありがとうございます」とお礼を申すことを心掛けていきました。すると、お礼の心が出やすくなっていったように思います。

以前は生活の中で、当たり前だと思っていたことが色々とありましたが、今では何事も決して当たり前ではなく、本当にありがたいことなのだと分かってきました。

これからも、人や物のお世話になって生活が出来ていることにお礼を申し、感謝させて頂きたいと願っています。

《取次を頂いて》第三回

「抜け出せるかもしれないよ」

岡山県・本部在籍　辻　徳子

ナレ　今日ご紹介する、辻徳子さんは、現在七十一歳。岡山県金光町にある、金光教本部の受付案内所で、参拝された方たちに、境内の施設案内や、金光教の歴史などを紹介しています。

元々は、東京都で生まれ育ち、祖母に手を引かれ、金光教の教会にお参りしてました。やがて成人し、教会で知り合った男性と結婚されます。子宝にも恵まれ、成長し、社会人として送り出し、落ち着きかけた時、二十四歳になった長男の身に、思い掛けないことが起きました。

辻　長男は大学を出てサラリーマンになりまして、横浜の営業所で営業マンとして働いていたんですね。その時に、急に会社から、「辻君が倒れた。すぐに来て欲しい」って電話が入りましたんで、救急車で運ばれた病院に行ったんですね。そしたら、本人はもう意識がなくて、ベッドに横たわっていたんです。事情を聞きましたら、過労で倒れてしまったっていうことなんですね。会社の人から、「すみませんでした。辻君に苦情処理の仕事をして頂いてました。辻君が苦情をもらったものではなくて、他の人たちの苦情、全部の苦情処理を辻君にして頂いていたので、多分ストレスと過労がたまっていたんでしょう」と言われました。階段を上がって、もう一歩というところで倒れて転げ落ち、頭を

打ってしまった。色んな検査をしまして、「命の保証はないです。もし、命があったとしても車椅子か脳障害、半身不随は免れませんから」って言われたんですね。それからですね、一週間後に突然本人が目覚めて、意識が戻ったんですね。そして、どこにも麻痺も残らずに、全部体が動いたんですね。

ナレ　医師の懸命の治療、徳子さん家族、教会の先生の祈りの中、一命を取り留めました。やがて職場にも復帰します。しかし、事故の後、長男の様子は今までとは違っていました。

辻　見た目はもう歩けますし、とっても元気なんです。ところが何かものすごく物事を気にするようになって、何か被害妄想的なことも言い出すし、そして本人が、「皆さんが言うことは分かるんだけれども、それに対して、自分がどのような言葉を持っていったらいいのか…言葉がね、適切な言葉が見付からないんだよ」って、ものすごく悩んだんですね。

ナレ　実は、頭を強くぶつけたことにより、脳の機能障害が現れていたのです。

ちょうどそのころ、ご主人は定年退職を迎えました。徳子さん夫婦は、いずれ金光教本部がある金光町に住みたい、と話し合っていたことがありました。長男の症状もあり、これを機に三人で金光町に移り住むことにしました。

長男は金光教の事務局で働くこととなりまし

たが、症状は悪化していきます。そんな時、ある講演会を行うことになりました。徳子さんはその日、不安な気持ちで長男の帰りを待ちました。

辻　帰ってきた時に、私は、また自分の言ったことが受け入れられなかったとか何か言って、不満だらけで帰ってくるかなと思って、すごい心配してたんですけども、開口一番ですね、「お母さん、このような状態から抜け出せるかもしれないよ」って言ったんですね。よくよく聞いてみると、講師の先生のお話を聞いて、「ああ、この先生なら、ひょっとして自分の今のこの状態を分かってくれるかもしれない」と思って、講演が終わった後、先生のところに行って、「自分はこういう状態でこうなんです」って何か先生に訴えたらしいんですね。じゃあ、先生が、「ああ、よう分かった。君のことはよう分かった。君は悪くないから、自信を持って進んで行きなさい。もし、進んで行く中で、〝あ、違ってた〟と思ったら、その時にまたそこから引き返してやり直せばいいんだよ。やり直すのは、決して悪いことじゃないんだよ。君のことは、わしがしっかりと神様に願っていくから、自信を持って、安心して、物事に取り組んでいきなさいって。こう言ってくれた先生がいた」と言ってですね。私も、あの時の息子の開口一番、「お母さん、立ち直れるかもしれない」って言った言葉、今でも耳に残ってるんですね。

ナレ　この出会いをきっかけに、先生の教会にもお参りするようになりました。

辻　先生はですね、もう全部吐き出させてくれる。もう心の内をさらけ出してさらけ出して、それで、「元気出すんですよ」って言われて、玄関に奥さんと先生が送ってくれて帰ってくる。また色んなことがあると、またそれを持って、全部さらけ出す。で、先生がまたそこへしっかりと神様に向かってご祈念して下さって、それで、「元気出しなさいよ」って言って、「しっかりわしも拝んでるから」…で、帰ってくる。

その繰り返しをしている内にですね、本当にいつの間にか…、「あんた、あんまりくよくよしなくなったね。言葉もちゃんと出るようになったね」っていうふうになってた。「そうなんだ」って言って、言われたことも理解もして、ちゃんと発言出来るようになったし、あんまり自分ばっかり責められるっていう思いもなくなったし、本当に元の性格に、いつの間にか戻っていったんですね。本当におかげを頂いて、心も元気になってた。

ナレ　この後も徳子さん家族は教会参拝を続けました。様々な心配や不満は、喜びへと変わっていきました。そして今、心配りと思いやりを大事にしながら、金光教本部へ訪れる人たちを、温かく迎えています。

《取次を頂いて》第四回

「師匠の教え」

岡山県・早島教会　玉井光雄

私は若いころ、小学校へ勤めていましたが、教会長である父が思い掛けず病に倒れ、亡くなりました。

周囲の者から勧められ、何の心準備もなく金光教の教師になるための養成機関に入学し、卒業はしましたが、私は、教会へ帰ったものの母親と二人で、何からしたらよいか分からず、途方に暮れていました。

その時、昔、私の父親が修行をさせて頂いた教会から、「しばらく修行に来なさい」と声を掛けて頂き、早速に教会へお参りしました。

教会は、正面に神様がお祭りしてあり、右手にお結界と言って先生が座っている一角があります。そこで、お参りになった人の話を聞き、神様に取り次ぎ、共に祈って下さいます。

その教会は、才崎教会と言い、私に声を掛けて下さったのは、教会長・片岡次郎先生です。

先生は、「よう来たのう、さあ神様にお頼みするぞ」と、お結界からご神前へ向きを変えて心中祈念をされました。かなり長い時間を掛けて拝まれてから、私の方へ向きを変えて、「神様へ、お前のこれから先のことをようお願いしたぞ。今日からは、お前は才崎の子じゃ、お前のことは、親の私が全て責任を持つ、これからはお前がしたいことは何でも自由にしなさい」と、ごく当たり前のように言われました。

私はその言葉にビックリしました。私は信心の修行とは、厳しい、苦しいものと覚悟していましたので、こんな信心の世界があったのか、この先生の言うことなら聞いてみようと思いました。

それから先生の元で、先生と生活を共にしている間に、次第にこの先生に付いて行こうと思うようになり、一方的にこの先生を師匠と頂き、弟子になる決意をしました。

一年間の修行生活から、私の教会へ帰る時、師匠の部屋へ呼ばれ、「お前はまだ、これから信心の基本を身に付けねばならぬ。当分は私の言うことだけを聞いて信心をしてくれ。周囲の色々な話を聞いたり、見ていると基本が出来ていないから、信心が混乱して我が身に付かぬ。私が、これで大丈夫と思ったら必ず合図をするから、それまでは私の話すことだけを聞いて信心してくれ」と言われました。

私は師匠の言葉を守り、私の身の上のことや悩み事をもって、師匠のお取次を頂き、その度に教祖の教えを話してもらい、信心の勉強をしました。

教会のご用が、やっと軌道に乗ったと思ったころ、とんでもない私の「うわさ」が耳に入って来ました。そのうわさは、「早島の若い者が、親の跡を継いでご用をしていたが、とうとう辛抱出来ず、母親一人を残して家出をし、行方不明になった」と言うのです。

私の知らないところで身に覚えのないことが伝わっていくことが承知出来ず、うわさの元を

正したいと思いましたが、まず師匠のお取次を頂いてからと、お参りしました。

師匠はいつものように神様へお願いして下さり、「あのなあ、『うわさ』というものは、誰が流したか犯人探しをするが、それは違う。世間の人は、そんな根も葉もないことを言うような者に関心はない。うわさをされた者が、うわさに対してどう対処するか、どんな受け止め方をして行動するかに注目しているのぞ。お前の信心が試されているのじゃ」と話されました。

私は世に言う、「うわさ話」が、うわさされる我が身にこんなに大切なものかと、目からうろこでした。

今日(こんにち)までの我が身を振り返り、我流でご用していたら、まさに、この「うわさ」通りの結果になっていただろうと思いました。

師匠が、私を呼んで下さり、信心の基本を習っているおかげで、今日のようなご用がさせて頂けている。師匠がある喜びを実感し、ますます元気を出して師匠の元へ、いや神様の元へ喜び勇んでお参りしました。

私はこうして二十六年通い続けましたが、師匠から、「信心の基本が出来たぞ」と許可が得られないままに、師匠が亡くなりました。

ところが、師匠が去って五年目の秋、明け方に師匠の夢を見ました。師匠は、私にハッキリと、「お前に今までさせなんだことをさせるぞ、しっかりやれよ」と言われました。その時は何の意味か分かりませんでしたが、その日の午後、一本の電話が入りました。「今度、中国地区教

師協議会の講師をお願いしたい、講題は、『我が師を語る』です」と依頼があり、明け方に見た師匠の夢はこのことだ。かねておっしゃっていた信心の基本が出来たら合図をするとは、このことだと実感しました。師匠は、生死の境を貫いてお取り次ぎ下さったと、思わずうれし涙が、止めどなく流れました。

以来、私のご用は各方面に広がり、講演依頼、そして私の本が次々と出版され、月刊誌も発行されましたが、ふと師匠のお取次の姿が心に浮かび、今のご用から、次の段階へ進む時と悟り、お取次のご用に専念するようになりました。

それから今日まで、お参りの一人ひとりのお話を聞き、一緒に神様に祈念し、心に感じたままを話し、納得して頂く日々を重ねている内に、いつしか年を重ねて今日のおじいさんになりました。

けれど、今なお徐々に、静かに、参拝者が増え続けております。師匠の教えに感謝です。

《シリーズ　平和》

「平和を生み出す心」

福岡県・竹下教会　田中一男

おはようございます。今朝もこの放送をお聞き頂きありがとうございます。平和な朝、静かな朝を迎えさせて頂き、有り難いことであります。

以前、ある紙面で「なぜ生きる」という言葉が目に止まりました。現代は当たり前のように言いたいことも、やりたいことも何でも自由に出来、何と有り難いことでしょうか。

私は昭和七年生れで八十三歳になりました。物心付いたころから戦争は続いていました。

毎日生きていくことに精いっぱいな時代でありましたので「なぜ生きる」ということを改めて考える余裕もありませんでした。

昭和十六年十二月八日の朝六時のラジオで、「大本営発表、帝国陸海軍部隊は米国及び、英国と戦闘状態に入れり」という放送が流れました。

当時、小学校四年生だった私は、「とうとう始まったか」と思いました。

私が住んでいます福岡市も昭和十九年六月十九日、大空襲に遭い、一夜にして焼け野が原になってしまいました。

迎え撃つ戦闘機もない状態で、なすすべがありません。米軍機が飛来し、農村部を襲い、低

空飛行して、人影を見ると機銃掃射を繰り返し、電車を見付けると反復攻撃を繰り返し、多数の死傷者が出ていました。

高等小学校一年だった昭和二十年八月十五日、正午から重大放送があるとの通達があり、それは、昭和天皇の玉音放送でした。その中で覚えているのは、「ポツダム宣言を受諾する」と「堪え難きを堪え、忍び難きを忍ぶ」との二つの言葉だけで、後はよく分かりませんでしたが、無条件降伏したということでした。

それからが大変でした。いろいろ不穏なうわさが流れ、当時農村部に疎開していましたが、「博多湾に米軍が上陸し、間もなく来るので、女、子どもは山に逃げろ」と人々を惑わしました。

また、農村にいながら食べ物が無いのです。近所の農家の方々がいろいろ良くして下さるのですが、これも限度があり、両親は大変苦労しました。食糧の配給はあるのですが、米はすぐ無くなり、押麦、小豆、大豆、トウモロコシ、脱脂大豆、これは大豆油を絞った粕(かす)で飼料として用意されたものと思われますが、こんな物まで米の代わりに配給されました。

別に食べる物がないのでいろいろ工夫して頂いておりました。野草も食べられる物は全部食べました。調味料もみそ、しょうゆなどはすぐ無くなり、塩の配給も少なくなり、電車に乗って海岸まで塩水をくみに行ったこともありました。

小柄な母が一時間掛けて電車の駅まで歩き、

更に電車で一時間、農家を回ってサツマイモを十貫目、今に換算すると、三十七キロほどを分けてもらい、リュックに入れて背負って一日掛かりで調達していました。時には母の晴れ着もお芋に変わっていました。

またお金の価値の変動も大変なものでした。戦争中の月給百円は高給取り、と言われていましたが、米軍が各地に進駐して来たころは一ドル三百六十円。物資が無い無いと言われていましたが、市内には闇市場が生まれ、おにぎり一個が十円くらいで売られていました。

私も中学に入る前に、近くの米軍基地に一般の労働者に混じって十日くらい、働いたことがありました。ハワイ出身の日系の兵士に会い、部屋に呼ばれて、軽い作業をし終わると、帰りにはチョコレートをもらって喜んで帰っていましたが、長くは続きませんでした。

昭和二十一年四月に新しく出来た私立の中学校に入学しました。家から一時間歩いて電車の駅まで行き、それから二十分くらい乗って通学していました。電車の本数も少なく、満員で、入って来る電車にどう乗るか、大変でした。私は電車の屋根に上るための取っ手みたいなところに一人ゆったりとぶら下がって通学しました。学校へ行っても弁当を持って来られない生徒が多かったので、授業は午前中だけの時期もありました。

中学三年になった時、制度が変わり、現在の六・三・三制になり、高校一年に進学しました。家の生活は苦しく、昔三百円あれば家が建つと

言われた時代に、父は、「三千円あれば大学まで行ける」と用意してくれていましたが、あっという間に消えてしまい、退学せねばなりませんでした。

一年過ぎて定時制高校の編入試験を受け、仕事が終わって学校へ行くのですが、腹ペコで当時十円で売っていたコッペパンも買うことが出来ませんでした。

今から思うとよく卒業まで頑張ったなと思います。卒業式では涙が止まりませんでした。

戦後七十年。現在の日本は豊かになり過ぎ、物はあふれ、社会制度が確立され、義務を果たすことは忘れ、むやみに自己主張を叫び、不平不満ばかり聞こえてきます。あのころのことを思うと感謝の心はどこへ行ったのでしょう。反省しなければならないことばかりです。

数年前ケニア出身のアフリカ人女性として史上初のノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイさんが、「もったいない」という日本語を生き返らせて下さいました。今ではコマーシャルにまで使われるようになりましたが、ありがたいことです。

前の金光教教主金光鑑太郎様は、

「世話になる　すべてに礼をいふこころ

平和生み出すこころといはん」

と詠んでおられます。

私も年寄りなりに、皆様の心の平和を祈り続けさせて頂きたいと願っております。ありがとうございました。

《ラジオドラマ》

ことの葉じんわり

脚本　菊村　禮

第一回
「生きて生かされる」

登場人物

き　ぬ（八十八歳）
一　郎（きぬの夫・故人）
浩　（きぬの息子／五十代）
和歌子（きぬの友人／八十二歳）
ユ　キ（浩の娘／十歳）
ナレーション

（プールで水中歩行を楽しむ人々の声、水しぶきの音）

き　ぬ　和歌ちゃーん、和歌子ちゃーんッ。さ、もう一歩きしましょう。

和歌子　もうプールの中、一時間も歩いたんだからクタクタよッ。

き　ぬ　あんたは私より六つ年下。お嬢ちゃんなんだからァ。

和歌子　私が？　八十二歳なのに？

き　ぬ　（笑って）和歌子って名前が泣くわよ。アハハハハ…。

ナレーション　八十八歳のきぬさんは若い頃に夫を

病気で亡くしましたが、一人息子の浩さんを立派に育て、今ではプールに通って気心の知れた仲間と身体を動かすことを楽しみにしています。ところがある日のこと…。

（畳の上に転ぶ音、椅子倒れる）

きぬ　（悲鳴）イ、イタッ。アイタタタ…。

（玄関の戸、勢いよく開く）

浩　母さん！　…大丈夫か？　母さん…骨ッ、骨は？

きぬ　腰が…。腰を打っちゃって…取ろうとしたんだよ。

浩　何を？

きぬ　箱。父さんが生きてたころ、よく作ってたじゃないか。趣味で人形を…。

浩　そう言えば、女の子の人形ばかり…。

きぬ　欲しかったもんだからさ、女の子が。もう一度始めてみようと思って材料が入った箱を取り出そうと思ったのよ。

浩　馬鹿！

きぬ　お前、親に向かって、言って良いことと悪いことが。

浩　今日は決算日だ。大切な客との商談を打ち切って抜け出してきたんだぞ。

きぬ　そりゃ悪かったね。すぐにお帰り。

もう何ともないから。

浩　じゃ、どうして呼び付けたりしたんだよ！　母さん一人じゃ何も出来やしないじゃないか！　どうすれば！

きぬ　どうすることもありゃしないよ。ここでじっとしていりゃ、すぐにお迎えが来るから。

浩　何てこと言うんだ！

きぬ　お前の世話にはならない。安心おし。ハイ、さようなら。

浩　（あきれて）じゃ、帰るぞ。

きぬ　勝手におし。

浩　どうなっても知らんからなー！

（夜、虫の声）

きぬ　（柏手を打つ）…（間）あなたニコニコ笑っちゃって、いい気なもんですねえ、あなたの写真――。…一人であの子育てるの、大変だったんですよ。

一郎　…。

きぬ　何とか言って下さいよ、あなた。…（あくびをして）あぁ、何だか生きてるのがやんなっちゃった。

一郎　（声）…生きて…生かされよ。

きぬ　えっ、お父さん？　何？　何ですか？

一郎　（声）…生きて、生かされてくれよ。（優しく）

きぬ　…生きて生かされてくれよ？　生か

される…。（眠ってゆく）

（朝のノイズ）

（玄関の戸開ける）

和歌子　きぬさーん！　きぬさーんッ！　…おカアちゃーん！

きぬ　（ハッと目覚める）…（時計を見る）イヤだ、もう九時…。

和歌子　入ってきちゃったわよッ。どうかしたの？　玄関の鍵開けっ放しだし…。

きぬ　（ハッとなって）そういえば昨日はプールの日！

和歌子　昨日は寂しかったわ。「おカアちゃんがいないとダメだねェ…」って。

きぬ　（不思議そうに）お母ちゃん？

和歌子　きぬさんのことを、みんなで「おカアちゃん」って呼んでるの。プールの中で、きぬさんは一番の年上。そのきぬさんが元気いっぱいで、「オイッチニッ、オイッチニ」って歩いてる…それを見るだけで、私たちは元気があふれてくるのよッ。小さな時、母親が元気に働いている姿を見るとワクワクしたようにね。

きぬ　…あたしが、ただ元気で歩いているだけで？

和歌子　そう。

きぬ　本当に、本当にただそれだけで？

和歌子　元気がいっぱいもらえるのよッ、お

カアちゃん！

ユキ　（心配そうに）おばあちゃーん！

きぬ　おばあちゃん？　私は「お母ちゃん」ですよ。…誰？

ユキ　私よ。ユキ。鍵開けてェ！

きぬ　ユキちゃん、よく来てくれたねえ。…（と玄関のドアを開けて）…オヤ、浩も？

浩　この間はきついこと言ってゴメン。その後どう？

きぬ　治っちゃったよ。私はまだまだ若い「お母ちゃん」なんだから。アハハハ…。

浩　（心配そうに）頭は打っちゃいないよな。

ユキ　おばあちゃんに、お願いがあってきたの。

きぬ　何だい？

ユキ　夏休みの宿題。お人形さん作ろうと思うの。お父さんが、「おばあちゃんは人形作りの名人だから、教えてもらえ」って。

きぬ　待ってました！　浩、あの箱を取っておくれ。

きぬ　そう…この中に綿を詰めて。お人形さんのお顔、ユキちゃんにソックリ！

ユキ　おばあちゃんにもよく似てる。

きぬ　私にも、こんなに若い時があったん

だねェ…ハハハハ…。

ユキ　今だって若いじゃん。

きぬ　ハイ。いつまでも元気でいて人様のお役に立たなきゃッ。

一郎　…生きて、生かされよ…。

《ラジオドラマ》第二回

「不合格おめでとう」

登場人物

哲　男（受験生／十八歳）
信　一（父／五十代）
安　江（母／四十代）
と　め（祖母／八十歳）
ナレーション

（うぐいすの声）

と　め　あぁ、うぐいすが鳴いてる…いい音色だねえ…今日から三月。庭の桃の花のつぼみが日に日に大きく膨らん

で…。

信一　…恐れていた「三月」が、ついにやって来た…。

安江　あなたー、のんびり庭を眺めてないで、神様にお祈りしてくれたの？

信一　…あッ、花瓶のお花がしおれてる。縁起が悪いな。水、替えてッ。今日は運命の日なんだから。母さん、携帯。

安江　首に掛けてあるわ…お水、取り替えましょう。（水をジャーッと庭にコボす音）

とめ　庭に捨てたりしてもったいないねえ…三月、今年もまた三月が巡ってきた…。

ナレ　三月。受験シーズンも終盤となりました。信一さんの家庭でも、一人息子の哲男君の受験した最後の大学の、今日は合格発表の日なのでした。

（掛け時計の音）

安江　（イライラして）遅いなあ。何をしてんでしょう、哲男。

信一　やっぱりダメだったか…。

安江　まさか…悲観してホームから…。

信一　不吉なことを言うんじゃない。落ち着け！　落ち着けッ！

安江　あなただって、さっきから火の点い

てないたばこをくわえっ放しじゃないの。

（玄関の戸開く）

信一　（同時に）あ、帰ってきた！（帰ってきたわ！）

安江　お前、迎えに行け！

信一　あなたが！

安江　…ただいま。

哲男　（妙にはしゃいで）哲ちゃん、お帰り、お帰りなさーい。

安江　ダメだった。寝る。

哲男　あっそう、そうか。

信一　哲男、お風呂は…!!

安江　「寝る」って言ってんだろ！

哲男　温まった方がよく眠れると思うが。

信一　眠れるわけないだろ。これから一年間、また地獄のような受験勉強が始まるんだから。

哲男　「運」が悪かっただけなのよ。ね、お父さん。

安江　う、うん…うん…。

信一　（カッとなって）「うん」だけなの？

安江　もっと気の利いた慰めの言葉が！

哲男　（ムッとして）誰も慰めてくれなんて言ってやしない。寝る。（去る）

安江　あ、あなた…。

ナレ　ふてくされた哲男君が自分の部屋に

入ろうとした時、祖母・とめさんの部屋の明かりがまだ点いていました。

哲男　（不思議そうに）おばあちゃん、まだ寝てなかったんだ…。

ナレ　哲男君がとめさんの部屋の前に行くと、明かりが漏れる障子の奥から…。

とめ　お帰り。おめでとう！

哲男　…え？

（障子開ける）

ナレ　ビックリした哲男君が障子を開けると、とめさんがいつものように神棚の前に正座をし、ニコニコしながら哲男君を見ていました。

哲男　…ただいま…。

とめ　（落ち着き払って）お帰り。

哲男　おばあちゃん、今、何て言ったの？

とめ　「おめでとう」って、そう言ったんだよ。

哲男　何で？　受けた大学、全部落ちたのに…。

とめ　そんなに不思議がることはないよ。哲男ちゃんは人様よりも一年間も余計に勉強することが出来るんだよ。運がいいねえ…こんなにうれしいこ

とはない。今から最高の人生が始まるのよッ。ホホ…ホホホホ。（心から楽しそうに笑う）

哲男　（つぶやく）…おめでとう！…不合格、おめでとう…か！　一年間、人より余計に…運がいい…そうか…よし！

ナレ　翌日から、哲男君の猛勉強が始まりました。

（朝、鳥の声）

哲男　（生き生きと）おやじ、悪いなぁ…予備校代、快く出してくれて。じゃ、行ってきまーす。

安江　…哲男、何だかすっかり元気になって。どうしたのかしら…。

信一　よく分からんが我々もピリピリし通しはかなわんからな。

（うぐいすの声）

ナレ　一年が経ち、また三月がやってきました。桃の花のつぼみが膨らみかけたころ、哲男君は念願の第一志望の大学に合格することが出来ました。

安江　（涙ぐんで）あ、あなた…！

信一　お前もよく頑張ったな。毎日の弁当

作り、お疲れさま！

安江　（ワッと泣く）

哲男　おばあちゃんは、あの時どうして不合格なのに、「おめでとう」って言ってくれたの？

とめ　（ちょっと、考えてから）…「有り難う」って、書いてごらん。この紙の上に。漢字で。

哲男　漢字で「有り難う」って？…書いてみる。…この字が、どうかしたの？

とめ　…三月になると、おばあちゃんは決まって思い出すんだよ。もう七十年も昔の話だけれど。

哲男　…七十年前？

とめ　戦争で東京中が焼け野原となった…その時、おばあちゃんは十歳。一晩中逃げ回って、ようやく夜が明け、火事も収まり、一息ついた時に見知らぬ人から恵んでもらった一杯の水のおいしかったこと。今でも決して忘れることが出来ない…。

哲男　（大きくうなずく）それでおばあちゃんは、いつもお水を飲む度に手を合わせているんだね。

とめ　おばあちゃんが味わった恐ろしい戦争の体験とあんたの受験とを、比べたりするのはおかしいけれども、つらい悲しい思いをすることによって、お前が本当の有り難さに気付かせて

もらえるんじゃないかと思って…。それでおばあちゃんは心から、「おめでとう」って、そう言ったんだよ。

哲男　…本当の有り難さ？

とめ　おばあちゃんはこの字が大好き！「難が有る…難が有るからこそ有り難い！」

哲男　（独白）「難儀」なことがあって、初めて分かる本当の有り難さ…、おばあちゃんありがとう！　僕はこれから強くたくましく生きてゆくよ。ありがとう！

《ラジオドラマ》第三回

「残った、残った」

登場人物

信　一（会社員／二十四歳）
美　加（看護師・新婦／二十七歳）
久　子（信一の母／五十代）
医　師
司会者

ナレ（美加）　私は今日、信一さんと結婚式をあげました。披露宴がもう少しでお開きになるというころ、信一さんはなぜか落ち着かないそぶりを見せ始めました。

美　加　どうかしたの？

信　一　何でもない。

美　加　ウソ。貧乏ゆすりしてるもん。

信　一　もうすぐ花束贈呈式が始まる。

美　加　それがどうかした？

信　一　お袋、今朝になって、「金びょうぶの前まで歩いていく。車椅子は使わない」って言って。

美　加　…で、でも…。

信　一　うまく歩けるワケないよなァ。松葉杖をついたとしても。右足しかないんだもの。

美　加　…でも、お母さんがそうなさりたいとおっしゃるのなら…。

信一　途中で転びでもしたら…。

美加　心配することないわ。だってあの夜だって、何もかもうまくいったじゃないの。

信一　…あの夜？

美加　あたしは看護師になって初めて迎えた当直日だったから、六年経った今でもはっきり覚えている。

（病院　担架の音）

美加　（セカセカと）お名前は？　お年は？

信一　山本信一。高三…。

美加　あなたのことではなく、今、救急車で運ばれてきた方。

信一　僕がいけなかったんです。受験に必要な書類、家に置き忘れて、「大至急学校まで持ってきて！」て急かしたからお母さん、慌てて自転車に飛び乗って…トラックにハネられて…僕のせいなんだーッ！

美加　落ち着いて！　お母さんの血液型、分かります？

信一　死んじゃうんですか？　お母さん…お母さんは…！

ナレ　（美加）お母さんの血液型は、特殊なＲＨマイナスＡＢ型でした。それを知った医師や私たち看護師の間に思わず緊張が走りました。

看護師　先生ー！　保存の血液はありませーん！

医　師　じゃ他の病院を！　大至急！

看護師　すぐ連絡取りまーす。

信　一　看護師さん、何かお手伝い出来ることがあったら。

美　加　祈って！

信　一　えっ？

美　加　祈るの！　近くの病院になければ、地域のラジオを通して献血を呼び掛けてもらうしかないの。それも一人や二人じゃダメ。どれだけ多くの人が協力してくれるか…。

信　一　僕のはB型。親子だから大丈夫かも。

美　加　先生！　僕の血をー！

信　一　祈って、あなたはただ祈ってッ。祈るのよーッ！

（不承不承）…う、うん。

ナレ（美加）　時計は夜の十時を回っていましたが、ラジオを聞いた人々がすぐに駆け付けて献血をしてくれたおかげで、危機一髪のところで信一さんのお母さんは命を取り留めたのでした。

美　加　良かった！　手術が無事に済んで。

信　一　母はいつ、いつ退院出来るのでしょうか？

美　加　ウーン、早くても、半年ぐらい先でしょうか。

信　一　そんなに長い間？

美　加　信一さんでしたね。高三なんだから、お母さんのことは私たちに任せてあなたは勉強！　しっかりね。

信　一　（つぶやく）この看護師さん奇麗で頼りになるけど、厳しいなぁ。

美　加　何か言いました？

信　一　イエ…何にも…。

（宴のざわめき）

司会者　宴も、いよいよたけなわとなって参りました…。では、ここで新郎のお母さま、今は亡きお父さま、あ、お母さまがお写真をお持ちですね…そして、新婦のご両親様への花束贈呈式へ移りたいと思います。ではご準備の方を…。

信　一　（心の声）お母さん、無理するなッ。

司会者　大丈夫ですか、お支えしましょうか。

久　子　イエ、一人で歩けます。今日は信一の一世一代の晴れの日（杖の音）。お父さんだってきっと見守っていてくれる。

（大きな拍手の音）

信　一　（心の声）お母さんが車椅子から立ち

上がった。杖を片手に…。大丈夫かなぁ…（思わず）お母さん、しっかりー。

久子　（杖の音止まり、一瞬よろめく足音）あ、ああーッ。

信一　（飛んでゆく）大丈夫かい？

久子　バカだねえ、そんなに慌てて。片足だけだってちゃんと歩いてゆける！

信一　…えッ？

久子　お父さんが亡くなった時、「これから先、まだ五つのお前を抱えて、どうやって生きていったらいいか…」と途方にくれたけど、今日まで無事に生きてこられた…。

信一　…お母さん！

久子　手術台の上で夢うつつの時、暗闇の中からお前の祈る声が聞こえてきた…。大勢の人たちが、「私の血を使ってー！」と優しく励ます声も。私は大きな温かいものに包まれているような気がした…。

信一　…大きくて、温かいもの…？

久子　「神様」だと思った。その神様が、母さんの右足だけは残して下さったんだよ。

信一　残して下さった？

久子　失ったものを嘆いても何にもならない。「残してもらったものに手を合わせ、感謝をする」。残った、残ったってね…そんな生き方が出来れば…。

司会者　（ホッとして）…では、おそろいになりましたところで花束の贈呈式に入りたいと思います。

（拍手）

信　一　お母さんありがとう！

美　加　これからもどうぞよろしくお願いします！

（拍手、盛大に）

《ラジオドラマ》第四回

「当たり前は当たり前？」

登場人物

邦　彦（民宿の主人／六十代）
初　江（邦彦の妻／五十代）
美智子（会社員／二十六歳）
妙　（民宿手伝い／十九歳）
ナレーション

（山鳥鳴く）

妙　旦那さーん、ラジオで言ってましたよ。「今年の夏は天候不順」って。

邦　彦　弱ったなぁ。山開きも済んで、これからが稼ぎ時だっていうのに。

妙　山登りのお客さんが少なくても、バイト代は払って下さいよ。

邦　彦　分かってるよ。

ナ　レ　山好きの邦彦さんと初江さん夫婦が、登山客のための民宿をふもとの村に開いたのは、今から十年ばかり前のこと。経営はうまくいっていましたが、昨年の冬、初江さんが病気にかかり、治療のかいもなく他界。今では、邦彦さんが一人きりで、夏の忙しい時期だけはアルバイトの妙ちゃんを雇い、細々と経営を続けているのでした。

妙　もう、戸締まりをしちゃってもいいですか、旦那さん？

邦　彦　（宿帳をめくる）いや、予約が一人入っているんだ。…島原、美智子さん。二十六歳…

妙　キャンセル。決まってますよ。

（戸開く）

美智子　こんばんは。

邦　彦　あ、いらっしゃーい。お待ちしてました。

（戸締めて）

美智子　こんなに遅くなってごめんなさい。

妙　（不審気に）一人で山に？　そんな靴で。

美智子　このお花、お水につけといて頂けますか？

邦　彦　奇麗なバラの花ですねえ…さ、どうぞこちらへ。

（朝、すずめの声）

美智子　おはようございます。

邦　彦　夕べはよくお休みになられましたか？

美智子　え、ええ。

妙　はい、バラの花。これを持って登山するんですか？

美智子　…好きだったんです、バラの花。

邦　彦　…え？

美智子　彼。一年前の今日、この山の頂き辺りで遭難して…。

邦　彦　それではあの方の…それでこの花を持って…。

美智子　待っててくれてるはずです。じゃあ…。

（トイレ掃除の音）

邦　彦　「トイレは特にキレイにすること」…死んだ女房がいつも言ってた。さぁ

これでよし！　フウッ、あれ？

ナレ　掃除を終えたお手洗いの柱に、以前に妻の初江さんが買ってきた一輪差しが掛けられていて、そこには真っ赤な大きなバラの花が生けられていました。美智子さんが一輪だけ忘れていったのを妙ちゃんが見付け、飾ったのでした。

初江　チーン。あ、トイレットペーパーが残り少ない…妙ちゃんに買ってきてもらおう…しかしすぐに無くなる…いっそ食べた物を出したりしなきゃいいんだけど…。

邦彦　…あなたー。あなたーー。

初江　（ハッとなって）誰？　初江か？

邦彦　（しみじみと）…毎日、息をしたり…ご飯を食べたり…当たり前だと思っているでしょう？　でも、違うの。当たり前のことなんて、何一つないのよ。

邦彦　（心の声）…初江、お前はよく野山の花を摘んできてはこれに差してたな。病に倒れてからはそれどころではなくなって…（涙があふれる）…（トイレットペーパーで鼻をかむ）。チ、

（つぶやく）…毎日、当たり前だと思ってご飯を食べたり…用を足したり…。…当たり前は、本当に当たり

前なのだろうか…。

（雷鳴、雨の音、突然激しく）

邦　彦　あ、雨！　（不安気に）島原さん、まだ戻ってこない…心配だな。よし！妙ちゃん、かっぱ、それと登山靴！早く！

妙　はい！

（風雨の音）

美智子　雄一、雄一さぁーん！

美智子　あたし、来たのよ。分かる？（風雨たたきつける）あッ、息が吸えない…く、苦しい！

邦　彦　島原さーん！　どこですかー？

美智子　（雨風さらに強く）雄一さん、雄一、さーん…。

邦　彦　あ、いた！　大丈夫か？　し、しっかりー！

（小鳥のさえずり）

妙　旦那さん、目を覚まされましたよーッ。

邦　彦　良かった！　…島原さん…。（後は言葉にならない）

美智子　山の中で息が出来なくてもう駄目だ

と思った時、どこからか雄一さんの声が聞こえてきて…。

邦　彦　雄一さんの？

美智子　「生きろ！　生きろ！」と強く――。

邦　彦　実は私も今朝方、死んだ女房のことを考えていたら、女房の声が聞こえてきて…。

美智子　…奥様の？

邦　彦　いさめられました。当たり前のことなんて、何一つないんだって。息を吸ったり吐いたり…当たり前に生きていられることに、感謝しなければいけませんよね。

美智子　当たり前に生きていられることに…。

邦　彦　例え相手がこの世にいなくても、心はしっかりつながっているものなのです。雄一さんは、あなたの胸の中にいつもいらっしゃる。雄一さんの分まで強く生きて下さい。

美智子　…（ワッと泣き崩れる）

ナレ（邦彦）　翌年、バラの花を持った美智子さんが、再び訪れてくれました。当たり前に生きられることに感謝出来るようになった彼女は、別人のように明るく変わっていました。

《ラジオドラマ》第五回

「幸せ貯金箱」

登場人物

明　美（主婦／三十一歳）
良　介（夫／三十五歳）
慎　一（息子／五歳）
雄太郎（会社員／七十代前半）
ハ　ル（祐太郎の母／九十代）
智　子（看護師／二十代）
医　師（五十代）
ナレーション

明　美　しゅ、腫瘍（しゅよう）が出来ている？　私の卵巣の中に？

医　師　…ハイ。

明　美　困ります！　あたしのおなかの中には、今、二人目の子どもが！

医　師　大丈夫。おなかに赤ちゃんがいても手術は出来ます。すぐ入院して下さい。

明　美　…せ、先生…。

明　美　（うなされて）…慎一、ごめんなさいねー。お母さんがいなくなっても、一人で強く生きていくのよ。

慎　一　イヤだ、イヤだッ。イヤだーッ。

良　介　（途方にくれて）明美…。

明　美　（泣く）

明美　（夢の中で泣いている）

智子　どうかなさいましたかーッ。大原さーん！

明美　（ハッと目覚めて）…看護師さん。…あたし、今、怖い夢を…。

智子　うなされてらっしゃいましたね。今日は朝から検査がたくさんありましたから、疲れて眠ってしまわれたのでしょう。このお薬、寝る前に飲んで下さい。

（カーテン閉める）

明美　薬なんて飲む必要ないわ。どうせ死ぬ運命なんだもの。…あーあ。

ハル　♪ソソラ　ソラソラ　兎（うさぎ）のダンス♪

明美　（心の声）お隣りのベッドの、おばあさんが歌ってるんだわ…。

ハル　♪タラッタ　ラッタ　ラッタ　ラッタ　ラッタ　ラッタラ♪

明美　（心の声）寝ながら歌う童謡（うた）じゃないでしょ！

ハル　♪脚で　蹴り蹴り　ピョッコ　ピョッコ　踊る♪

明美　人の気も知らないでー！

ハル　♪耳に鉢巻　ラッタ　ラッタ　ラッタラ♪

明美　あー、耳栓でも持ってくりゃよかっ

た！　ちょっと、ちょっと…お隣りさーん！（カーテン開ける）おばあさん！

ハル　おばあさん？　私の名は、「ハル」。

ナレ　入院した病院の同じ部屋には「ハルさん」という名の高齢の女性がいました。軽い認知症らしく、看護師さんとの会話もトンチンカンになるので、心が不安定な明美さんはついイライラしてしまうのでした。その日の夜遅く、ハルさんの息子さんと思われる年配の男性が、お見舞いに訪れました。

雄太郎　母さーん。…かあさーん…。

ハル　持ってきてくれたかい？　貯金箱。

雄太郎　忘れたりする訳がないでしょ。母さんの大事な貯金箱。

（貯金箱を振り鳴らすやかましい音）

ハル　たくさん入っているねえ。

雄太郎　母さんが長いこと掛かって貯金したんだよ。

（貯金箱を振り鳴らす音、以前よりもさらに激しく）

明美　うるさーい！　やめてー！

（貯金箱を振る音、急に止まって）

―少しの間―

雄太郎　…ちょっと、失礼してもよろしいでしょうか？（と、前とは打って変わった紳士的な態度で）

明　美　（イライラしたままで）…どうぞ。

雄太郎　（カーテン開ける）隣のベッドの相川ハルの息子の雄太郎です。スミマセン…大層なご迷惑を掛けて。

明　美　手術の前の晩なんです。何ですかッ。あのやかましい音は。

雄太郎　（静かに）…貯金箱です。

明　美　そんなことは分かっています。私が聞いているのは…なぜ、今、病人の枕元で貯金箱を振り鳴らしたりするのかってこと。

雄太郎　…母にとっては、この貯金箱を振り鳴らす音が一番、心が落ち着くからなのです。

明　美　えっ、どうして!?

雄太郎　この貯金箱が「幸せ貯金箱」だからです。

明　美　…幸せ貯金箱…？

雄太郎　父が、戦争に取られた時、母はおなかに私を宿していました。そして私を産む時に大層難産で…死に掛けたといいます。もうろうとした意識の中で母は、必死に神様にすがりつい

たそうです。

明　美　神様に？

雄太郎　この子の命を、どうかお救い下さい。…母の願いは、すぐさま聞き届けられました…。喜んだ母は、お礼の印に神様と、ある約束をしたそうなのです。

明　美　…どのような？

雄太郎　私は毎日一回必ず誰か人様を幸せな心持ちにして差し上げるという「幸せ貯金」を生涯忘れずに続けてゆきます。

明　美　…一日に一回必ず誰かを幸せに…。

ハ　ル　雄太郎、そろそろお帰り。電車がなくなってしまうよ。

明　美　ごめんなさい。ご事情もよく分からぬまま私は…。

雄太郎　（貯金箱をガチャガチャ振って）うるさい音ですよねぇ…ご迷惑をお掛けしました。

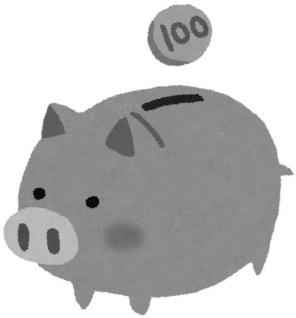
明　美　いいえ！　私の方こそ感情的になってどうも済みませんでした。

ナ　レ　翌日、明美さんは無事に手術を終えました。そして卵巣の中に出来ていた腫瘍は、良性のものであるということが、分かったのでした。

良　介　明美、良かった、本当に良かった。

明　美　あなた、色々ありがとう。ねえ、お

願いがあるの。明日、貯金箱買ってきて下さる？



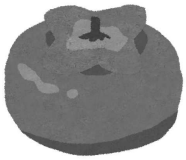
《ラジオドラマ》第六回

「笑って許しておくれ」

登場人物

由起江（主婦／五十代）
春　代（母／八十五歳）
ヨ　ネ（春代の親友／八十五歳）
一　夫（ヨネの息子／五十代）
隣　人（男性／六十代）
ナレーション

（鳥の声）



隣　人　林さーん！　うちの木の枝にまたお

宅の洗濯物が引っ掛かってるよーッ。

由起江　（ハッとなる）まただ、お隣りの頑固おやじ、何でも文句をつけるんだから。（戸開ける）ごめんなさい。今、片付けます。

ナレ　由起江さんは、数年前に夫の太郎さんを病で亡くし、今では八十五歳になる母親の春代さんと庭付きの一軒家に住んでいます。家の近くに、春代さんの子ども時代からの「ヨネちゃん」という親友が住んでおり、春代さんは毎日のようにヨネさんの所に行っておしゃべりをしてくるのでした。

春　代　ただいまーッ。

由起江　アラ、もう帰ってきちゃった。

春　代　ヨッコラショ。ただいま。

由起江　もっと、ゆっくりしてくれば良かったのに…。

春　代　ヨネちゃんとは毎日会ってんだから、話すことなんてありゃしない。

由起江　ねえ、お隣りの内藤さん、今日もまた怒鳴ってきた。秋になって柿が熟れて落ちたら、また怒鳴り込んでくるわよ。

春　代　そりゃ、お前の婿の太郎さんがいけなかったね。植える時にきちんと断っておかなかったから。

由起江　無理よ。うちの人が縁側で柿を食べて、口から吹き出した種が自然に芽を出して、気が付いたら枝がお隣りに張り出すほど大きくなってたんだから。

春　代　「お断り」をしておくことは大切だよ。先々のことを考えて周りの人に「お断り」さえしておけば波風が立たないんだよ。

由起江　（聞いていない）ヤダヤダ。今年は柿がならなきゃいいのに。

ナ　レ　今年は残暑が殊の外厳しくて、蒸し暑い日が続いていました。ようやく秋風が立ち始めた頃、思いも寄らぬ電話が入ったのでした。

由起江　えッ、何ですって？　亡くなった？　ヨネさんが？　ま、まさか…。

春　代　う、うそ。うそに決まってる。間違いだよ。昨日もヨネちゃん元気におしゃべりしてたのに。

由起江　心臓の発作なんですって。お風呂に入っている時に倒れて…。

春　代　ヨネちゃん！　ウッ、ウッ、…ウウウッ…。（泣き崩れる）

由起江　…お母さん…。

（葬儀の祝詞（のりと）の声）

一　夫　ご参列頂きましてありがとうございました。母も喜んでいることと思います。

春　代　あんまりあっ気なくあの世へ逝ってしまわれたもんだから、私は、もうどうしたらいいか…。

一　夫　母は八十を過ぎたころから、事あるごとに言っておりました。

「一夫、これからもっと私は年を取って頭や体が思うようにいうことをきかなくなった時、ついイライラしてどんなにひどいことを言ってしまうか分からない…だから、今のうちに断っておくよ。その時はごめんなさいよ…そうなってしまったら笑って許しておくれ」と…。

由起江　…笑って、許しておくれ…と？

一　夫　母は最期まで元気に過ごしておりましたから…もう手を引いてやることも食事を口に運んでやることも…何一つ、してやれないと思うと…。（こらえきれずに嗚咽）

由起江　…（胸がいっぱいになって）一夫さん…。

一　夫　（改まって）春代さん、母と最後まで仲良くして下さり、本当にどうもありがとうございました！

（夕暮れの往来）

春　代　（しみじみと）…心のこもった、いいお葬儀だったねえ…。

由起江　…本当に…柿！　見て！　柿がみんなお隣の庭に落っこっちゃってる…変ねえ…、頑固おやじ、怒鳴りこんでこなかった…。

春　代　入院したんだって。

由起江　えっ！　入院…。

春　代　ゴミ出しに行ったら奥さんが話してた。長い間うちで看病してたけど…もう覚悟を決めたって。

由起江　頑固おやじ、だなんて言って悪いことをしたわ。

春　代　気にすることはない。

由起江　いいえ！　私はお母さんに対しても…。

春　代　母さんにも？

由起江　育ててもらった恩も忘れて、時にはヒドいことを言ったりもする…そんな自分が、つくづく嫌になっちゃった…。

春　代　（笑って）だから、「お断り」をするんじゃないか！

由起江　してるわ！　こうやって…。

春　代　ちがう。「お断り」をするのは、神様になんだよ。

由起江　…神様に、「お断り」を？

春　代　他人をけなしたり不平不満を言ったり…そんな欠点だらけの自分だけれど…。

由起江　（大きくうなずく）そんなダメなあたしだけれど…。

春　代　直してゆきますから。

由起江　それを神様に「許して下さい！」と。

春　代　「お断り」をして生きてゆけばいいんだよ。神様は「可愛いやつだ」って…。

由起江　笑って許して下さる！

（泣き笑って）お母さん、長生きしてね！

《ラジオドラマ》第七回

「最後の言葉」

登場人物

明　子（翻訳家／四十歳）

文　彦（夫・新聞記者／四十三歳）

紀　子（娘／十三歳）

明　子　（パソコン打つ音）…平凡過ぎる。何てありふれた日本語訳。…出来ない、ああ出来ない…これじゃ、突き返されるわ。出版社に…。もっと気の利いた言葉は出てこないかなァ…。

ナレ（明子）　私は大学の英米文学科を卒業した後、出版社に就職しました。大学のクラブの先輩で新聞社勤務の文彦と結婚し、長女・紀子の出産を機に退職して家庭へ入りました。子育ても一段落したので翻訳の仕事を始め、今では次々に頼まれる仕事をこなすのに精いっぱいの毎日なのです。

（パソコン打つ音）

文彦　おはよう。あれ、いない。オーイ、明子ー。まだ仕事やってんのかー？　もう朝だぞー。

明子　…。（少しも気付かずパソコン）

文彦　（ドア開ける）おい、知らんか？　この間銀座に行った時に買った革靴…。

明子　（聞いてはいない。パソコン打ち続ける）

文彦　銀座の革靴。

明子　（ようやく我に返って）あ、おはよう、何？　銀座の革靴？　…買ったっけ？

文彦　何言ってんだ。お前が本屋で立ち読みしている間に、ホラ、バーゲンで…。

明子　（遮って）知らないわよ。げた箱の中、よく探してみた？

文彦　確かテレビの横にあった大きな紙袋

の中に…。

明子　…あ、それならゴミに出して捨てちゃった。

文彦　何だと！　中を確かめもせずに捨てたのか。それで、主婦が務まるのか！

明子　おあいにくさま。今の私は主婦ではなくて翻訳家。忙しいのよ、明日、原稿の締め切りなんだから。いいじゃないの、今まで履いてた靴で。

文彦　…俺は、それでも構わんがな、紀子の食事、ちゃんと作ってやってくれよ。紀子ももう十三歳。思春期の真っ最中なんだからグレでもしたら大変だ。…仕事、もう少し減らせないのか…俺だって随分我慢…。（と言い掛ける）

明子　（遮る）お願い、我慢して！

文彦　我慢も、もう限界だー！

（郊外電車の音）

（パソコンキー）

（台所の音）

明子　…誰？　台所で物音が…ま、まさか泥棒…？

（ドア開ける）

明子　…あなた、帰ってきてたのね。「ただいま」ぐらい言ってよ。

文彦　言ったさ。

明子　聞こえなかったわ。夫婦の間は連絡が一番！

文彦　俺、さっき新聞社で「言葉」についてのコラムを、書き上げてきたばかりなんだ。

明子　コラム？

文彦　だから、だからさ、君に謝る。ゴメン。

明子　（うろたえて）何か悪いこと、あたしにした？

文彦　ウッカリ靴を捨ててしまったお前を俺叱り飛ばして…。

明子　そうだったわね。忘れてた…。

文彦　（笑って）それじゃ話にならないな。

明子　コラムの題は「最後の言葉」。最後の？

文彦　村を突然竜巻が襲って、家族の中で一人だけ生き残ってしまった少女の話。学校へ出掛ける前に両親とケンカをしてしまったんだ。

明子　…それで？

文彦　その少女は後悔したんだ。自分の親に最後に話した言葉が、「パパもママも死んじゃえばいいんだッ」ってことに気が付いて…。

明子　…まぁ…。

文彦　君の言う連絡も、確かに大切には違いないけれど…。今朝、俺が最後に言った言葉、覚えてる？

明子　…何だったかなあ…「愛してる」じゃなかったことだけは確か。

文彦　（乾いた笑い）玄関出た途端に車にひかれてたかもしれないんだ…いつ、君との暮らしが、ピリオドを打ってしまうか…そんなこと誰にも分かりゃしない。

明子　あなたの言うことはよく分かったわ。言葉は相手に「心」…そう、あったかーい「心」を、伝えるためのもの。

文彦　（笑う）…（コーヒー煎れる）コーヒー、煎れたんだ…冷めちゃったけど…飲む？

明子　ウン。

文彦　（コーヒーカップ置く）つまり、大切なことは感情のままに、今朝の俺みたいにさ…言葉を暴走させないってことなんだ。もう一度謝る、ごめん。

明子　（うろたえる）いいえ！　謝らなければならないのは私の方なのよ。ごめんなさい。

文彦　（優しく）翻訳の仕事、これからも頑張れよ。応援してるから。

明子　（ウッとなって）あ、あなた…！

紀子　（ドア開く）ああ、お腹空いたー、ママ、夕ご飯、まだ？

文彦　俺も腹減ったー。

明子　（笑って）ハイハイ。（冷蔵庫ドア開く）作り置きしといたものでもいい？

紀子　あ、ハンバーグ！　おいしそう！

紀子、チンするね！

文彦　（同時に元気良く）頂きまーす！

紀子　さ、君も早く食べて、仕事！　俺、後片付けするから。

文彦　紀子も手伝うよ、パパ！

ナレ（明子）　朝が来て、夜が来て…また、次の日の朝が…。慌ただしくも、何気なく過ぎてゆく毎日――。家族や友人、出会えば必ず別れなければならない私たち…。「最後の言葉」――。それがいつになるのか、何になるのか…。いいえ、そんな悲しいことを考えたりするのは止めよう。「今日一日の命」を、神様より賜っている幸福に、私はもっと、もっとたくさん感謝をして、頂いている命を思う存分輝かせてゆこう！

《ラジオドラマ》第八回

「腹立ち心をお供えする」

登場人物

範　夫（四十代）

妙　子（妻／四十代）

純　一（運転手／二十二歳）

ナレーション

（秋の訪れを現す虫の声）

範　夫　柿食えば…鐘が鳴るなり…（グーッと鳴る、範夫の腹の音）いや、いや…これは俺の腹の虫の音…食欲の秋というのは、本当なんだなぁ。…あ、そうだ。死んだおやじは、栗が大好物だった。おーい、妙子ーッ！

妙　子　何ですか、あなた。

範　夫　明日、栗を買ってきてくれ。お供えだ。上等なのを。

妙　子　上等な栗。分かりました。

ナレ　日頃から信心深い範夫さんは、神様へのお供え物を絶やしたことがありません。そこで、妻の妙子さんが次の日に早速栗を買い求め、お供えをしました。ところが…。

範　夫　な、何だッ。この穴はッ。…あ、虫、虫が食っているじゃないか！

妙子　安かったのよ、でもおいしそうよ。虫だってよく分かってるんですよ。

範夫　「上等な栗を」と、言ったはずだ。神様に、申し訳が立たない。死んだおやじにも叱られる。悪いことが起きたらお前のせいだーッ！

ナレ　さて、次の日になりました。

（垣根壊れる）

妙子　あ、あなた、大変、うちの垣根が…。

純一　あ、あの…す、すみません。すみません…。

範夫　…な、何だ、俺んちの垣根が…。

純一　小学生が乗った自転車を、とっさによけようとしてうっかりぶつかってしまって…。

範夫　オイ、この垣根は庭いじりが大好きだったおやじが、腕の良い職人に頼んで特別にこしらえてもらった、大切な垣根なのだ。それを、こんなにめちゃくちゃにして…。

妙子　あなた…この際だから、新しく頑丈なコンクリート塀に換えましょうよ。

範夫　と、とんでもない！　お前には、おやじの気持ちが分からないのか！　そうだろうな。虫食いの栗を、平気でお供えしたお前になど分かるはずもなかろう。おい！　運転手、元の

通りに直してもらおう。

純一　は、はい…。あの…いかほど？

範夫　（ズバリと）百万！

純一　えッ、百万円!?　僕の安月給じゃとても！

範夫　それなら、おやじさんに払ってもらうんだな。

純一　父は、死にました。小学校の卒業式の直前に病気で…。母が、必死に働いて僕を育ててくれましたが…四年前、とうとう病気にかかって…それで僕は仕方なく大学を中退して免許を取り…トラックの運転手に…。お金は必ず働いてお返しします。お願いしますッ、お願いしますーッ。

範夫　（心の声）俺のおやじが死んだのは、つい三年ばかり前のこと…小学校から大学の卒業式にまで、いつも仕立て下ろしの真新しい背広を着てうれしそうに参列してくれたっけ…。大学の卒業式の晩には、免状が入った筒を神棚に供えて何度も、何度もかしわ手を打って…あーあ、俺は幸せ者だったんだなぁ。そんな幸福な俺に引き換えこの青年は…（声に出して）ウウッ、ぐすん。

妙子　あなた、泣いてんですか？

範夫　…そうか。…分かった。働いて少しづつ返してくれ。

純一　あ、ありがとうございます。

ナレ　彼は連絡先を告げ、何度も頭を下げて、帰っていきました。

（門扉に車がぶつかるけたたましい音）

妙子　（表に出て）た、大変！　あなた、大変ッ！

範夫　な、何だ。朝っぱらから…。

ナレ　すっかり元通りになった垣根を眺めて、ご満悦の日々を過ごしていた範夫さんでしたがひと月後、今度は門扉を壊され、あげくに運転手にも逃げられてしまいました。

範夫　見てみろ！　お前が神様に虫食いの栗をお供えしたばかりに、今度は門を壊された。

妙子　いいえ、何かといえば、すぐに、カッカとなるあなたのその心、神様が、「何とかしろ」とおっしゃっているに違いないわ。…そうだ！　あなたの「腹を立てる心」を取り出して、リボンでもくくって、試しに神様にお供えしてみたら？

範夫　バ、バカな！

ナレ　結局、妙子さんの「試しに」という言葉に促されて、範夫さんは、半信

半疑で「腹立つ心」を、神様にお供えしてみることにしました。…すると、どうでしょう…。「腹立つ心」が、あの「虫食いの栗」のようにも見えてきたのでした。

範夫　…オッ、二つ並んでいるな…虫食いの栗と「腹立つ心」…ああ、こんなにいやらしいものを、神様にお供えしたりしてはいけないな。

範夫　（心の声）車をぶつけて逃げていった人も、今頃、仕事も手に付かず悩んでいるかも…可哀想に。そうだ！　祈ってやろう。

妙子　あ、あなたーッ。警察から連絡が！　逃げた人が自首してきたんですって。…そうか。良かった、良かった。

範夫　ごめんなさい、あなた。虫食いの栗なんてもう絶対にお供えしませんから。

妙子　いや、いいんだ。俺も悪かった。今度腹を立てたら…。

範夫　…腹を立てたら？

妙子　今日はよく寝て、明日また考えてみよう…そう思っているうちに、いつか腹立つ心もなくなってしまうだろうよ…ハハ、ハハ…ハハハハハ…。

《ラジオドラマ》第九回

「赤飯炊いて祝え」

登場人物

虎　雄（タクシー運転手／四十代）

恵　美（主婦／三十代）

始　（恵美の息子／六歳）

（自動車止まる）

寅　雄　どうぞー。（乗り込む音）（車のドア閉まる）どちらまで。

恵　美　中央桟橋へ。

寅　雄　…中央…桟橋…。こんな夜更けに…。

恵　美　行って下さい。

寅　雄　は、はい…。

（ドア閉まって自動車走りだす）

ナレ（寅雄）　その晩、私のタクシーに乗ってきたお客さんは、五、六歳の男の子を連れた若い母親でした。こんな夜更けに中央桟橋に何の用があるのか…。

始　お母さん、いつ買ってくれるの？

恵　美　何を？

始　オセキハン。

恵　美　まだそんなことを。

始　ねぇ、どこで売っているの？

寅雄　坊ちゃん、お赤飯、食べたいのかい？

始　うん。

寅雄　おむすびにしたのなら、スーパーで買えますよ。

恵美　食べなくていいの。おめでたいことなんか、何一つないんだから。

始　ミッちゃん家のママが、「明日は小学校の入学式だから、お赤飯を炊いてお祝いをしましょう」って言ってたよ。

恵美　ミッちゃん家は、ミッちゃん家。うちはうち。

（自動車止まる。桟橋付近の音）

寅雄　はい、お客さん、着きました。

恵美　じゃあこれで。お釣りは、要りません。

寅雄　（ドア開ける）お客さん、ちょっと…！帰りはどうなさるんですか？　この辺で待ってましょうか？

恵美　…でも、いつになるか…。私、今夜はもう仕事をアガリにしますんで、いいです。待ち料金はゼロで。

寅雄　…でも…。

恵美　海の景色、坊ちゃんと楽しんできて下さい。今夜は星も奇麗だし。お星様…地球の向こうじゃ見えないわ。あっちは今、お昼だから。

寅雄　…ええッ？

（野良犬のうなり声）

始　お母さん、怖い、怖いよー。

恵美　シ、シッ。シッ、シッ、シッー！

寅雄　あ、大丈夫ですか？（ドア開ける）…コラ、コラ…よし、いい子だ…お前、腹、減ってんだな。ちょっと、待ってな！（座席の荷物まさぐる）ほら、弁当の残りだ。食いな！

（うれしげに鳴く野良犬の声）

寅雄　俺と同じだ。

恵美　…同じ？　運転手さんと？

寅雄　「宿無し」ってことなんです。

恵美　お家が、無いんですか？

寅雄　アパートの持ち主が、突然変わって、家賃が上がっちゃって…。今は会社の寮に泊めてもらってはいますけど、相部屋で。落ち着かなくって。

恵美　そうなんですか。

寅雄　ところがね、田舎のお袋に、「アパートを追い出された」って言ったら、「じゃ、赤飯を炊いて祝え」だって。

（苦笑い）

恵美　えっ？

寅雄　お袋に「宿無しになった」って言ったら、「赤飯を炊いて祝えば、うまく

いくから」って、そう言うんですよ。

恵美　どういう意味なんですか？

寅雄　ウーン…つまり、「つらく苦しい時にこそ、人は大きく成長する。だから祝え」って。私が事故を起こした時も、会社が倒産した時にも、「寅雄、安心をおし。お赤飯を炊いて祝ったから」って電話があって…実際、事故もこじれずに済んだし、会社もそれまでより待遇の良いところへ入れたし。不思議といえば不思議…。

恵美　…不思議、ではないのかもしれません。

寅雄　…不思議では、ない？

恵美　はい。「つらい苦しいことをバネに替えて！」というそんなお母さまの強い願いが、「お赤飯を炊いてお祝いする」ということに表れているのではないでしょうか…。

始　お母さん、早く行こうよ。桟橋に。

恵美　ちょっと待って！　さっきの野良犬…。

寅雄　腹がいっぱいになったから、もうどこかへ行ってしまいましたね。

恵美　（しみじみと）…つらく苦しい時にこそ、人は大きく成長する…。お腹がすいたり、帰れる家が無かったりしても、それを犬には「生きる糧」に変えることが出来ない。でも、あたしたち人間はそれをバネにして強く

生きることが…あたし、何だか生きる勇気が湧いてきました。

寅雄　それは良かった。じゃあ、早く桟橋へ。

恵美　いえ…もういいんです。

寅雄　え？

恵美　この子の父親、仕事で海外へ渡ったきり…もう、五年も戻ってきてはくれないんです。向こうに誰かいい女（ひと）が…不安に思って…。寂しくなると海に来て…。

寅雄　そうだったんですか。明日は坊ちゃんの入学式だとおっしゃってましたね。

恵美　ええ。

寅雄　おめでとう！　学校へ入ったらな、勉強をしっかりね。お父さん、きっと海の向こうで応援してくれてると思うよ。じゃ、そろそろ戻りましょう。乗って下さい。

恵美　（泣けてくる）ありがとう…ありがとうございます。

（自動車発車音）

ナレ（寅雄）　数日後、奇麗な女文字の手紙が会社に届きました。

恵美　「前略　先日、中央桟橋まで御社の

タクシーに乗った時、運転手さんにとてもご親切にして頂きました…」

恵美

「入学式にはお赤飯を炊きました。すると、なんと『休みを取って帰る。小学生になった息子に会いに』と海の向こうからメールが届いたんです。お母さまのおっしゃったことは本当だったのですね。ありがとうございました。

寅雄

ああ良かった。本当に良かった！おめでとう!!

金光教本部　ラジオ放送係

住 所　〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷３２０

電 話　０８６５-４２-６４５３

FAX　０８６５-４２-２１１４

メール　w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

ニッポン放送	日曜日	あさ４時３０分
東海ラジオ放送	金曜日	あさ５時２５分
朝　日　放　送	水曜日	あさ４時５０分
ＲＫＢ毎日放送	日曜日	あさ６時５０分

こころで輝くおはなし　検索